はてしなき世界

小川未明

青空文庫

ここにかわいらしい、赤ちゃんがありました。赤ちゃんは、泣きさえすれば、いつも、おっぱいがもらえるものだと思つていました。まことに、そのはずであります。いつも赤ちゃんが泣きさえすれば、やさしいお母さんはそばについていて、柔らかかな、白いあたたかな乳房を赤ちゃんの唇へもつていったからであります。

それから、まただいぶ日がたちました。

赤ちゃんは、もとよりまだものがいえませんでした。ただ手まねをしてみせたばかりです。赤ちゃんは、なにかお菓子がほしいと、小さなかわいらしい、それは大人の口なら一口でのんでし

まわれそうな、やわらかな掌てを振ふつて、「おくれ。」をいたしました。

すると、なんでも、よく赤あかちゃんの心こころ持もちがわかるお母かあさんは、いつでも、赤あかちゃんの好きすきそうな、そして毒どくにならないお菓子かしを与あたえました。それで、赤あかちゃんは、いつもお乳ちちが飲のみたければ、すぐにお乳ちちが飲のまれ、またお菓子かしがほしければ、いつでもお菓子かしをもらうことができたのです。

赤あかちゃんは、そう都合つごうよくいくのを、けっして不思議ふしぎともなるとも思おもいませんでした。そして、むしろそれがあたりまえのように思おもっていました。というのは、お母かあさんがそばにいなかつたときでも、おっぱいがほしいといって、すぐにもらわれないと怒おこつ

て泣いたからです。

あるとき、赤ちゃんは、だれもそばにいなかったとき、茶だんすにつかまって立ちながら、たなの上に乗っている、めざまし時計をながめました。時計は、カッチ、カッチ、と行って、なにかいっていました。赤ちゃんは、不思議なものを見たように、しばらく、びっくりした目つきで、黙って時計を見ていました。そして、赤ちゃんはにっこりと笑いました。赤ちゃんは、時計がなにかいって、自分をあやしてくれと思うたのです。赤ちゃんは、時計をいつまでも見ていました。時計はしきりに、なにか赤ちゃんに向かっていますので、赤ちゃんは、幾たびもにっこりと笑って、時計に答えています。そのうちに、赤ちゃんは、お

菓子^{かし}がほしくなりました。それで、かわいらしい^{みぎて}右手を出して、時計^{とけい}に向か^むつて、「おくれ。」をしました。

まる^{まる}円い顔^{かお}の時計^{とけい}は、ちよつと頭^{あたま}をかしげて、笑い顔^{がほ}をしましたが、

なんにも赤^{あか}ちゃんに与^{あた}えるものを、時計^{とけい}は持^もつていませんでした。

赤^{あか}ちゃんは、幾^{いく}たびも幾^{いく}たびも「おくれ。」をしました。しかし、

なんの応^{こた}えもなかつたのです。このことは、どんなに、赤^{あか}ちゃん

をさびしく、また頼^{たよ}りなく感^{かん}じさせたかわかりません。そして、

そのとき、急^{きゆう}に赤^{あか}ちゃんは、お母^{かあ}さんがなつかしく、恋^{こい}しくなり

ました。

赤^{あか}ちゃんは、急^{きゆう}に泣^なき顔^{がほ}をしました。そして、身^みのまわりを見^み

まわしましたけれど、そこにはお母^{かあ}さんがいませんでした。さび

しさをこらえていたのが、ついに我慢がしきれなくなつて、赤ち
 ゃんは大きな声をあげて泣き出しました。すると、お母さんは、
 驚いて、走つてきました。

こうして赤ちゃんには、お母さんが、だんだんはつきりとわか
 つてきました。

お母さんがわかると、一刻もお母さんから離れるのは、赤ちや
 んにとつて、このうえなく悲しかったのであります。けれど、お
 母さんは、赤ちゃんが、独りで遊ぶようになる、いろいろ仕事
 があつて、忙しいので、そういままでのように、赤ちゃんのそば
 にばかりは、ついていることができませんでした。

お母さんは、お勝手や、洗濯をなさるときには、細かいこう

しじまのエプロンを着^きていなさいました。赤^{あか}ちゃんは、お母^{かあ}さんが、そのこうしじまのエプロンを着^きなされた姿^{すがた}を見るのが、なによりも悲^{かな}しく、さびしかったのです。赤^{あか}ちゃんは、エプロンを着^きなされると、お母^{かあ}さんが、あっちへいってしまわれるのを知^しったからです。そして、お母^{かあ}さんが、そのしじまのエプロンを脱^ぬぎなされた姿^{すがた}を見たときは、また、どんなにうれしかったでありましよう。お母^{かあ}さんは、すぐにここへきて自分^{じぶん}を抱^だいて、おっぱいをくださることがわかったからです。

それで、赤^{あか}ちゃんには、なによりもいやな憎^{にく}らしいものは、その汚^{よご}れた、こうしじまのエプロンでありました。

赤^{あか}ちゃんは、エプロンを見ると、かんしゃくを起^おこしたり、だ

だをこねたりしました。

「ほんとうに、赤ちゃんは、エプロンが大きいなのね。」と、お母さんは笑いながらいわれました。

赤ちゃんは、いつのまにか、家の人たちが知らないまに、エプロンを縁側から地面に落としてきました。しかし赤ちゃんの捨てたり、隠したりすることは、お母さんにとってなんでもありませんでした。いつでも必要なときは、すぐに見つけられたからであります。

ある日、お母さんは、汚れたエプロンを洗濯して、庭さきさおにかけておきました。すると、エプロンから、しずくが、ぴかぴかと光って、幾つとなく落ちては、また後から後から落ちて

たのでありました。

赤ちゃんあかは、座敷ざしきにちよこなんとすわっていていながら、まぶしうな目めつきをして、エプロンがさおにかけてあるのをながめていました。どんな気持ちきもで赤ちゃんあかがそれをながめているか、知しつたものはありません。

しかし、赤ちゃんあかは、憎にくらしいエプロンだと思おもっていたには相そ違ちがいと思われおもれます。短みじい日かであつて、一日いちにちには、そのエプロンはよく乾かわきませんでした。そして、日暮ひぐれ方がたから風かぜが出てきて、天気てんきが変かわりかけたのであります。

エプロンが、さおにかかつて、ひらひらとなびいているのを、その日ひの晩ばん方がた、赤ちゃんあかはもう一度ど、縁えん側がわの障しょう子じにつかま

つて立ちながら見たのでありました。

やはり、だれも、そのときの赤ちゃんあかの心こころ持ちを、知るものはありませんでしたけれど、赤ちゃんあかは、うんとエプロンが風かぜに吹ふかれて、風かぜが、あのエプロンを遠とおい、もうけっして見みつからな
いとところへ、持もつていってくれればいいと思おもつたでありますよ。

エプロンはまだぬれてもいたし、また惜おしい品しなでもなかつたら、そのままにして家いえの内うちへいれずにおきますと、その夜よ雨あめ風かぜが吹ふき荒あれて、ほんとうに夜よるの間あいだに、エプロンは、どこへか飛とんでいってしまったのです。

お母かあさんは、それでも空そらが明あかるくなると、エプロンは、どこへ飛とんでいったらうと家いえのまわりを探さがしました。すると、赤あかちゃん

の憎らしく思ったエプロンは、溝の中に落ちて、水の中にうずま
つていました。

「まあまあ、こんなに汚くなつてしまつたから、捨ててしまいま
しょう。」と、お母さんはいわれました。

お母さんは、エプロンをごみ箱の中に捨ててしまいました。こ
うして、赤ちゃんのきらいであつたエプロンは、永久に、も
う赤ちゃんの目から見えないところについてしまつたのです。

その翌日から、赤ちゃんは、家の内にエプロンを見ませんで
した。けれど、お母さんはやはり、いつでも自分といつしよに遊
んだり、ねころんだりしてはいられませんでした。あの細かいこ
うしじまの代わりに、お母さんは、どこから真っ白なエプロン

を持ってきて働いていたのです。

赤ちゃんには、もうどうしたらいいかわからなくなりました。

そして、ついに、自分の大好きなお母さんは、（いつでも自分はお母さんといっしょにいたいんだけど、）自分といるものではないということを知りました。そして、そのことは赤ちゃんにとつて、いいようのないさびしさを覚えさせたのであります。

この赤ちゃんは、いつしか日数をへて、かわいらしい坊ちゃんとなりました。

坊ちゃんは、もうそのころから、自分は、ただ一人であるというような、さびしさを感じたのであります。みんなから離れて、ぼんやりと道の上に立って遠くの雲をながめたり、また、空をは

てしなく飛んでゆく鳥の影を見送ったりして、かんがえ込んでい
るようなことが多うございました。

ある夏の日の晩方のことでありました。この感じ深い子供は
道の上にたたずんで、いつものように頭の上を飛んでゆく鳥をな
がめていました。もうあたりはだんだんと暗くなりかけてしまし
た。けれど、鳥の飛んでゆくかなたの空だけは、明るい、なんと
なくなつかしい色を、瞳に映じたのでありました。

「ああ私も鳥になりたい。そして、あっちの明るい国へ飛んでゆ
きたいものだ。」と、子供はいいました。

すると、どんなものに対してたいも注意深く、また耳みみざとい鳥は
下の方を向いて、すぐに子供を見つけて、そのいうことをすつか

り聞いたのでありました。

「坊ちゃんぼっは、私わたしといつしよにあつちへゆきたいのですか。だけれど、それはできません。私わたしのゆくところは、たいへんに遠とおいところなのであります。私わたしは、坊ちゃんぼっに、私わたしの持もつていような目めと、私わたしの胸むねに宿やどつていような魂たましいを分わけてあげますように、神かみさまにお願ねがいしましょう。そうすれば、坊ちゃんぼっは、いつも私わたしたちと同じおなように、ほかの人にんげん間まにはわからないうふような、不思議ふしぎなきれいな光ひかりを見みたり、また、かすかな遠とおい音おとを聞きくことができます。」といつて、鳥とりはこの子こ供どもの頭あたまの上うへでないて、また、遠とおい旅たびをつづけてゆきました。

それから、子こ供どもはひとり、空そらや鳥とりの影かげばかりでなく、花はなや、石いし

や、木や、なにに対してもじつと見入って、深くものを思うようになつたのであります。

けれど、この子供が、黙つて、じつともに見入っているのを見、心の中に、どんなことを考えているか？ やはり、だれもそのことを知るものはなかつたでありますよ。

世の中の大人は、てんでに頭の中で、金もうけのことや、暮らし向きのことなどを考えて、さつさと道の上を歩いています。そして、だれも地の中にうずもれた、かすかな光があつても、それに注意を向けるものではありませんでした。

「ガラスびんのかけらだろう。」

みんな、そんなように思っていたのであります。

そのとき、この子供は、遠くから、この紫色の光を見つけ
 て、わざわざそのところまでやってきました。そして、小さな手
 で、棒切れでもって地の中から、その光る石を掘り出しました。
 青黒い色をした小さな石でありました。この石は、子供がじ
 つとその石を見つめたときに、

「坊ちゃん、よくあなたは、私を見つけてくださいました。私は、
 長い間、この地の中にうずめられて、かすかな光を放って、だれ
 か、私を掘り出してくれるのを待っていました。しかしだれも、
 私をば注意しませんでした。たまたま注意したのも、私の
 そばまでやってきて、じつと見ますと、私が、銭でなかったの
 ——その人は、私を見て銭が落ちていると思つたので——私

の頭あたまを蹴けつて、さっさと行ってしまいました。そして、私わたしは、たよりなく、不幸ふこうでした。私わたしは、いつ、また、坊ぼっちゃんの手てから捨すてられるかしれません。けれど、坊ぼっちゃんが私わたしを手にとつて、しばらくでも大事だいじにしてくださいました。ご恩おんは、けっして忘れわすはいたしません。坊ぼっちゃんは、きつと私わたしと同じい色いろのものを、この世よの中で、しかも人間にんげんの目めの中なかに見みられることがあります。そのときこそ、ほんとうに、坊ぼっちゃんが喜よろこびなさいますときですよ。」と、その小ちいさな石いしが、ものをいっているように思おもわれました。

はたして、この石いしが氣遣きづかったように、この石いしを子供こどもは大事だいじにし

ておいたけれど、いつとなくどこへかなくしてしまいました。

「どこへかなくしてしまつたらう？」と、子供こどもは石いしを探さがしました。

けれど、見^み当^あたりませんでした。しかし、その石^{いし}の青^{あお}い色^{いろ}は、いつまでも子^こ供^{ども}の目^めの中^{なか}に残^{のこ}っていました。なんとというなつかしみの深^{ふか}い、青^{あお}い色^{いろ}であつたらうか？

こうして、子^こ供^{ども}は追^つ懐^{いかい}にふけるといふことを覚^{おぼ}えました。子^こ供^{ども}の立^たっている前^{ぜん}方^{ぽう}には、輝^{かが}かしい野^の原^{はら}がありました。そして後^{うしろ}方^{ほう}には、うす青^{あお}い空^{そら}がはてしなく拡^{ひろ}がっていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「童話」

1923（大正12）年3月

※表題は底本では、「はてしなき世界《せかい》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2014年4月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

はてしなき世界

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>